



追悼
IN MEMORIAM

青木淳一博士追悼文



青木 淳一 博士 (1935–2022)
Professor Jun-ichi Aoki (1935–2022)
「青木淳一教授 退官記念文集」より
(2001年, 神奈川県立生命の星・地球博物館にて, ご遺族提供)

青木先生のご訃報に接して

“私はいま、机の上に一枚の紙を広げて懐かしい思いで眺めている。その紙の中央には小判形のテーブルの形が描かれ、その周囲には集まった人達の名前と所属が書き込まれている。佐々学先生を中心に、今村、浅沼、江原、黒佐、北岡、白坂、金子、山口、大島、伊戸、松本、宮本、吉田、中田、茅根、和田、藤川、根本、鈴木の各氏、それに青木の名が並んでいる。これは1973年6月22日、東京大学医科学研究所の会議室に東京近郊で活発にダニ研究を開始していた人達が初めて集まり、「ダニ類研究会」が発足したときのことである。”

これは記念すべき日本ダニ学会誌第1巻1号(1992年発行)に、故青木淳一先生が初代学会長として加えられた序文の文頭で、「ダニ類研究会」は本学会の前身です。今、

私の手元に青木先生がたぶん初めて執筆された一般書、「ダニの話—よみもの動物記—」(1968年出版, 北隆館; ¥380!!!) があります。これは先生が国立科学博物館に居られた30歳代前半に執筆されたものですが, 平易かつ軽妙な文章の中に, まだ社会認知度が低く, さらには社会での一般的なイメージの悪いダニという生物が, 実は愛らしさや学問的な面白さを持つ魅力的な生き物であることを世間に広く知ってもらおうとする高い目的意識と, 生物に対する深い愛情を感じる本です。

「滝しぶき苔むす岩にダニの紅」

「ダニの毛を数えてめしを食い忘れ」

とは, 本書のあとがきにある先生の「……俳句だか川柳だか……」とのことで, 温和なお人柄が偲ばれると共に, 学会での先生の笑顔が頭に浮かびます。

農林水産省の果樹試験場で, 防除対照としてのハダニ対策という観点からダニ研究に入った筆者は, 残念ながら研究面で青木先生と親しく接する機会は多くはありませんでした。それでも, 先生が「ダニの生物学」(2001年出版, 東京大学出版会)を編纂された際には, 冷や汗をかきながら分担執筆をさせていただき, ついつい文章が難しくなってしまう私の原稿に対して, 丁寧にご指導いただいたのを覚えています。

青木先生のご訃報に接し, 日本におけるダニ学創成期からの分類学と生態学の発展における多大なご業績とその貢献, 本学会へのご尽力に対して最大の敬意と感謝を表すると共に, 謹んで哀悼の意を表します。

刑部 正博 (日本ダニ学会会長)

青木 淳一 博士 (1935–2022) を悼む In Memoriam: Professor Jun-ichi Aoki (1935–2022)

本会名誉会員で, 横浜国立大学名誉教授の青木淳一博士が, 2022年11月11日, 87歳で御逝去された(以下, 青木淳一先生)。青木先生は本会の前身であるダニ類研究会を支えられた後, 1992年の本学会の初代会長として, 本学会の発足において指導的役割を果たされ, 長らく本会の運営についても大きく貢献された(青木, 1992)。また, 2018年から国際ダニ会議の終身名誉会員であった(故今村泰二博士に次ぐ国内2人目)。

青木淳一先生のご専門は, ササラダニ類(土壌ダニ類)の生態と分類, および, ホソカタムシ類(昆虫類)の分類である。青木先生がご研究を開始され, ササラダニ類の最初の新種記載論文(Aoki, 1958)が公開されたときには, 日本から6種しか記録がなかった。

しかし現在では日本から900種を超える種が記録されるに至った(Subias, 2023: 久保田直 私信)。そのうち, 約70%は新種で, 青木先生あるいは関係者とともに, あるいは関係者によって新種として記載された。さらに, そのうちの約70%は青木先生御自身が発見され, 新種として記載された約450種である。

また, 青木先生は日本ばかりではなく, 御自身で採集されたハワイ諸島, 中国(雲南省), 台湾, 韓国, インドネシア, それ以外に送られた標本としては, マリアナ諸島, ニューギニア, タイ, マレーシア, フィリピンなどから150種以上の新種を発見, 記載された。さらに, 日本に生息するホソカタムシ類は現在70種1亜種とされており, そのうち青木先生の約10年間の研究活動で18種1亜種が命名記載された(青木, 2012,

2013など).

青木 (2008) は、「ササラダニ類の多くの新種が記載出来たこと、これは自慢ではなく、ササラダニが (ヨーロッパを除いて)、特に日本を含むアジア地域において、いかに調査が不十分であったかの証になるのである」と述べている。しかしながら、調査不十分であるはずの日本から記録されたササラダニ類の種数は、ついに世界で一番となった (Maraun and Scheu, 2000)。ササラダニ類は低緯度地域 (赤道周辺) で種数が多くなり、高緯度地域では種数が少なくなる傾向が明瞭にある。それでも、国ごとの種数で、日本は圧倒的である。低緯度地域に広大な領土を持つブラジルでさえも 576 種にすぎない (Oliveira et al., 2017)。日本が、ササラダニ類の多様性を生み出すのに適していたのではなく、青木先生御自身の圧倒的な新種記載と、青木先生が育てられたプロ・アマを問わない門下生のササラダニの研究者集団の成果に違いないのである。

さて、1935年6月京都市に生を受けられた青木先生は、学習院初等科、中等科、高等科と進まれ、1958年3月に東京大学農学部農学科を卒業論文「日本産オニダニ科の分類」をもって卒業された。1963年3月には、東京大学大学院生物系研究科博士課程を修了され、博士論文「奥日光のササラダニ群集構造と植生および土壌との関連についての研究」によって農学博士 (東京大学) を授与された。

1964年に、ハワイ・ビショップ博物館昆虫研究部上席研究員、1965年に国立科学博物館動物研究部研究官を経て、1975年4月に横浜国立大学助教授 (同大学環境科学研究センター)、まもなく1977年4月には、横浜国立大学教授 (同大学環境科学研究センター) に着任された。

横浜国立大学環境科学研究センターに赴任された1975年から、それまでのササラダニの分類学と生態学でのご研究に加え、土壤動物の環境指標生物としての利用と手法の確立を進められた。1994年4月に横浜国立大学環境科学研究センター長、2000年4月には神奈川県立生命の星・地球博物館長を務められ、2001年3月に同大学停年退官、名誉教授となられた。

学会活動では、1976年から2年間土壤動物研究会会長を経て、1978年5月に初代日本土壤動物学会会長を務められ、1992年1月に日本ダニ学会初代会長、そして、1994年1月に日本動物分類学会会長と、その後も学会長職を歴任された。国内では、日本ダニ学会、日本土壤動物学会、日本動物分類学会、そして、日本蜘蛛学会の4学会の名誉会員であった。

受賞歴は1968年 日本動物学会論文賞、1989年 日本土壤動物学会賞、1998年 日本動物学会賞、1999年 中山賞大賞、2001年 南方熊楠賞、2003年 日本生態学会功労賞、そして、2008年 日本動物分類学会賞を受賞された。

さて、青木淳一先生のご研究で有名なものとして、ゾウムシの背中で暮らすササラダニがまず挙げられるだろう。ニューギニアの森林で発見された翅が開かず飛べないゾウムシの背中に着生する地衣の一種、その中に潜り込んで生活していたササラダニは、生息場所も特異なら形態も特異であった。さらに当時、ササラダニの性的二型はあまり知られておらず、オスメスで異なった形態によって、新属新種 *Symbioribates papuensis* Aoki, 1966として記載新しい科 *Symbioribatidae* Aoki, 1966を創設された。

森林のマイクロヒタット (微環境) のご研究は、世界中でよく引用される青木先生の研究成果であり、青木先生の発想が独自性を持っていることを裏付ける研究成果ではなかろうか。この研究成果が発表されるまでは、世界中でササラダニの採集には、採土



青木 淳一 博士と、里子 奥様
(2012年、スペインにて、ご遺族提供)

管などで土壌を採取するか、あるいは、場当たりにコケなどを採取しダニを抽出するということが行われてきた。しかし、Aoki (1967) は、10メートル四方の林床のコケ、地衣類、倒木、大きな倒木の下、倒木の皮、など、考えられる様々なマイクロハビタットについて、それぞれ異なるササラダニ種が優占していることを明確に示した。おそらく青木先生が幼いときから親しんでこられた昆虫採集で、その住みかを探す時の発想ではないかと思われる。ダニ類はクモガタ類の仲間であり、それまでの世界のダニ学者が昆虫採集の発想にたどり着くことはなかったのではないだろうか。

樹上のササラダニ群集についての青木先生のご研究も、よく世界中で引用されている。このご研究にも青木先生の視点の独自性が表れている。ササラダニ類には胴感毛という特殊な感覚毛が(ケダニ類などと比較して)大きく発達し、体の両側に1対つきだしている(ケダニは複数対)。ササラダニの種を分けるためにもこの毛の形態が重要である。余談だが、ササラダニの「ササラ」というのは、この毛が中華料理で使われる竹の棒「簾(ささら)」に似ているためである。さて、Aoki (1973) はこの胴感毛を樹上専門(樹上性)のグループ、土壌と樹上を往き来するグループ、土壌専門のグループと分けたところ、樹上性の種だけがこの胴感毛が属や科を超えて、全て先膨れの短い胴感毛である事を示した。土壌性のササラダニでは、この胴感毛が分類形質としてもっとも大事であったのだが、樹上性のササラダニではこの形質が分類に使えないのだということを示したことになる。この研究成果は、青木先生が初めて参加されたチェコのプラハでの国際ダニ会議で、多くの関心を集めたという(青木, 2008)。

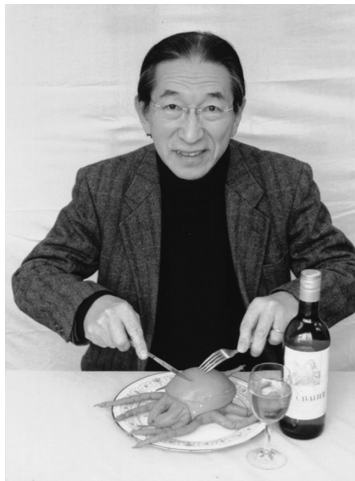
1980年のボルネオの熱帯雨林のダニと土壌動物の調査によって、青木・原田(1982)は土壌動物の変遷を明瞭に示した。焼畑農業から、自然林までの土壌動物をサンプリングし持ち帰り、青木先生は30名近い専門家に、種ではなく属レベルで、かつ、半年の同定で依頼された。熱帯の土壌動物なので、種レベルなら10年はかかると判断されたからだった。みごとに半年で同定結果が集まり、その結果をまとめてみると、自然林が焼畑農業で失われると多くの土壌動物がいなくなった。しかし、チガヤ草原、低木林、陽性二次林、そして二次林へと植生が回復していくにしたがって、土壌動物も回復して

いった。しかし、一部の分類群だけは自然林が消失してしまうと二度と回復してこなかった。土壤動物の回復が明瞭に示されると共に、一度、自然林が破壊されると、ほぼ永遠に失われてしまう土壤動物やダニのグループがいることもわかったのである。

ササラダニ類を環境指標に用いる手法の確立は、青木先生の横浜国立大学時代の大きな成果である。自然林、二次林、人工林、草原、牧草地、果樹園、都市公園、道路植栽など、人為的干渉の度合いがことなる環境を、日本列島2900地点から得られたササラダニ種を選び整理してみると、ちょっとした人間の影響で姿を消してしまう種、それほど影響を受けない種、相当劣悪な環境になってもしぶとく生き残る種があることがわかった。これを逆手にとって、ある環境のササラダニ群集の種組成を調べれば、その環境の自然性が判定できるという考え方から、環境の変化にはっきりと反応を示すササラダニ100種を選び、人為干渉にもっとも弱い（敏感な）種を5点、もっとも強い（鈍感な）種に1点、その間の種に4、3、2点という評点を与えた。出現した種の評点を平均したものを環境の自然性の高さの指標としたのである（青木、1995、2008など）。

ササラダニ類の環境指標化は、青木先生が横浜国立大学の環境科学研究センターに赴任されたために、取り組まれたご研究であるが、日本から6種しか記録がなかったササラダニ類において、多数の種にコツコツと名前を付けて来られたからこそ、成り立った研究成果であった。名前が付けられていなければ、そもそも同定が出来ないので、環境指標化は成立しなかった（青木、2008）。

なお、環境指標化のための土壤試料の採取方法として青木先生は、「拾い取り法」を提唱されている（青木、1978）。これは周囲のマイクロハビタットを少しずつ、サンプリングすることによって、従来の採土管を土壤に複数打ちこんで定量的に採集する方法よりも、その環境に生息するササラダニの多くの種をより効率的に採集できるという土壤試料の採取方法である。前述したマイクロハビタットのご研究から発案された、青木



青木 淳一 博士 (1935–2022)
「青木淳一教授 退官記念文集」より
(2001年、ご遺族提供)

先生らしいオリジナルな方法である。この方法は、ササラダニ類の環境指標化の手法として用いられている。青木先生の環境指標化の論文は残念ながら日本語の論文が多いため、十分に海外に広く伝わっていない。筆者は英語でこの一部を紹介した (Shimano, 2011)。

ササラダニ類の分類学的研究で、青木先生が多くの成果をあげられた訳であるが、*Archezogozetes longisetosus* Aoki, 1965の新種記載が、世界のササラダニ研究に大きな影響を与えていることは、日本では意外に知られていない。土壌動物学者の今立源太郎博士 (カマアシムシの専門家) を含む採集隊によって、マレー半島から持ち帰られた約1万頭のササラダニ類の標本の中から、青木先生がドイツ語で本種をタイの標本をもとに記載された (Aoki, 1965a) (青木先生の初期の新種記載はいずれも先生が得意とされていたドイツ語である)。その後、*A. longisetosus* は、ニューヨーク州立大学の R. A. Norton 博士によって、ニューヨーク州産の個体をもとに、飼育系が確立し、ササラダニ類のモデル生物として、Thomas (2000) から始まり、20年ほどの間に、発生、遺伝、形態、化学生態、生態毒性などに関する研究、70報告以上が行われた (Heethoff, et al., 2013)。これらの論文の多くにはタイトルに、「*Archezogozetes longisetosus* Aoki, 1965」と記載者としての青木先生の名前が明快に記されているのは、日本人として誇り高い。

東アジアに主に分布しているイカダニ科を分類学的にまとめた83ページにも及ぶリビジョン (Aoki, 1965b) は、分類学者としての青木淳一先生の名前をさらに有名にした。また、これもまた分厚い論文である、現在のイレコダニ上科とヘソイレコダニ上科の89ページに及ぶリビジョン (Aoki, 1980) も、よく知られている論文である。

面白い種としては、マレーシアから新種として記載された、奇妙奇天烈な格好のエボシダニ (*Idiozetes erectus* Aoki, 1976) は、当時、新科 *Idiozetidae* を創設されたくらいで、所属さえも良く解っていなかった (現在は、ドテラダニ科 *Eremaozetidae* に所属するのではないかと考えられている: Colloff, 2012)。

青木先生が新科新属新種として記載された *Aribates javensis* Aoki, Takaku and Ito, 1994 も面白いダニである。Ito and Takaku (1994) によって、カドフシアリの一種の巣の中から発見されたダニは、ブヨブヨしていて自分では歩けない。アリが移動を手伝い、餌もアリが与える、さらに脱皮もアリが手伝うというものであった。しかし、餌がなくなると最終的にアリによって捕食される、「非常食」であったのだ。青木先生は、この大変不思議な生活をするダニに、「アリバテス・ジャウエンシス」というアリにちなんだ新しい属名を与えられた (ジャワ島で発見されたという意味の種小名)。このダニは、1科1属1種で、現在も所属が不明である (Subías, 2023 では、ドテラダニ上科 *Eremaozetidae* に所属しているが、理由は明確に示されていない)。

なお、エボシダニ、ドテラダニ、イカダニ、ヘソイレコダニ、コソダニ、そして、オトヒメダニなど、親しみやすい和名を付けられたことも (青木, 2016)、ササラダニに興味を持った研究者集団が形成された原因のひとつであるだろうし、中学校1年生用の教科書 (「自然の小さな診断役」という題名で光村図書・国語, 1993年から2001年まで掲載) に、ササラダニの和名が散りばめられた青木先生の著作が掲載された理由のひとつかも知れない (加藤, 2013)。

再び、青木先生のユニークなご研究に戻りたい。本物の「街のダニ」の研究は青木先生のユニークさが現れている研究成果だろう。東京の銀座のデパートの屋上で見かけた、タイルの隙間のコケを車の鍵ではぎ取り、タバコの箱に入れて持ち帰り、その中の

ダニを調べたところ、日本未記録のシワイボダニ科のダニが見つかったのである（青木, 1983, 2000）。後に、神戸、JR三宮駅のプラットフォームをタイプ産地として、シワイボダニ *Scutovertex japonicus* Aoki, 2000 と記載命名された。同様に、横浜国立大学の側の歩道橋のステップをタイプ産地として新種記載されたヨコハマコイタダニ *Oribatula (Zygoribatula) vicina* (Aoki, 2000) など、日本全国のコンクリート建造物のコケに生息するササラダニ類をまとめられた（青木, 2000）。あわせて20種のササラダニがこれらのコケから見つかった。

このうち、サカモリコイタダニはシワイボダニと同じく、都会の劣悪な環境に好んで生息しているらしく、道路の植え込みなどの土壌から多数発見される。しかし、人間がコンクリート建造物を作ったのはごく最近のことであり、どこかの自然環境の中に彼らの本来の生息場所があると青木先生は考えられて、その場所を突き止めたいと思うようになられた。長崎県の壱岐の海岸で、岩場の風衝低木林に目にとめられた。潮風に強い常緑低木が乾燥した岩場にしがみつくように生えて、人間の影響はほぼない自然植生であった。するとみごとに、この低木林の土壌試料からサカモリコイタダニが多数出てきたという。本種の「ふるさと」が見つかった瞬間である。

「都市の高速道路の下の植え込みは風に吹きさらされて乾燥し、土壌も貧弱で、海岸の風衝低木林にそっくりではないか、おそらく、風に吹き飛ばされて空中を飛んできたサカモリコイタダニは都会の道路植栽に着地すると、ここは自分たちの故郷と同じだと思って住み着いたのであろう」（青木, 2008）。もう一種のシワイボダニは、筆者も青木先生と一緒に様々な場所で、石灰岩質の岩に生えているコケをねらって調査した（青木, 2009）。しかし、未だにシワイボダニは自然環境からみつかっていない。

南西諸島のササラダニ類は（青木, 2009）、青木先生が特に好まれた琉球列島（南西諸島）のササラダニ類323種の生物地理学的研究である。琉球列島には三宅線、渡瀬線、蜂須賀線などの有名な生物分布の境界がある。ササラダニの分布は境界線などとは無関係だと青木先生は予測されていたが、分布図を整理してみると意外にもこの境界線をまもっている種が多いことがわかった。また、島の面積×高さでササラダニの種数は一致していた。つまり、島の面積が大きいほど、標高差があるほど、その島が多様な環境を持っていることになるので、ササラダニの種数と相関が見られたのである。言うのは簡単なことであるが、南西諸島は膨大な数の島から成り立っている。この人間が住む全ての島のササラダニのデータを集約されているのであるから、説得力が格段に違う。余談ではあるが、青木先生は、南西諸島だけではなく、日本全国の人間が住む島を全て踏破されている。

「調査を終わって、日本の亜熱帯は世界で生物多様性が最も高い地域ではないかと言う感を強くしています。美しく愛すべき島の自然の中、昼間は森の地表堆積物を拾いまくる、夜は焼酎、泡盛、飛び魚、島ラッキョウ、島豆腐……40年にわたる調査行の苦勞と楽しさを思い出しています。」とは、青木先生の御言葉である（青木, 2009を送っていただいたときに、添えられていた青木先生からのお手紙より）。

みんなで、美味しいものを食べてワイワイ騒ぐのが青木先生は大好きであった。日本ダニ学会大会でも、学会前にテニス大会を開き、また、泊まり込みの学会大会として、若い学会員から、著名な学会員までの交流を持つように推進されたことが、今日の日本のダニ研究者の繋がり、ダニ学の礎を築いていると言っても過言ではないだろう。

海外の研究者のご指導にも多くの力を注がれた。韓国、中国、台湾、モンゴルの土壌

動物学，ササラダニ研究の黎明期に，青木淳一先生がご協力・ご指導なされた研究者が，その後その国の土壤動物学やササラダニ研究の礎を築かれている（Wen et al., 1984; Choi and Aoki, 1985; Aoki and Wang, 1986; Bayartogtokh and Aoki, 1997; 青木ら，1997など）。

この追悼文を閉じる前に，書いておかなければならないことがある。それは，世界中，どこに行っても，「Prof. Aokiのササラダニの絵はとにかく美しい」と絶賛されることである。その証拠に，Krantz and Walter (2009) や，Behan-Pelletier and Lindo (2023) などの大きな教科書には，青木先生の許可を得て，青木先生のたくさんの数の新種記載に使われたササラダニの図が掲載されている。長年コツコツと，誰も成し得ないようなササラダニ研究の業績を打ち立てられ，日本を世界一のササラダニの多様性の国（世界一ササラダニ種がたくさん記録された国）とされた青木先生。世界のダニ学者が集うメーリングリストに，青木先生御逝去の連絡を送ると，世界中のあらゆる分野のダニ学者から数多くの追悼のメッセージを頂いた。

青木淳一先生の最後のお言葉は「もうやるだけのことは，やりきった」であった，と奥様からお伺いした。日本が世界に誇るダニ学者のひとり，青木淳一先生のご冥福を心から祈りたい。

島野 智之（法政大学自然科学センター）

引用文献

- Aoki, J. (1958) Zwei *Heminothrus*-Arten aus Japan (Acarina: Oribatei). *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 31: 121–125. (In German)
- Aoki, J. (1965a) Oribatiden (Acarina) Thailand. I. *Nature and Life in Southeast Asia*, 4: 129–193. (In German)
- Aoki, J. (1965b) A preliminary revision of the family Otocepheidae (Acari, Cryptostigmata) II. Subfamily Otocepheinae. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo, Series A, Zoology*, 8: 259–341.
- Aoki, J. (1966) Epizotic symbiosis: an oribatid mite, *Symbioribates papuensis*, representing a new family, from cryptogamic plants growing on backs of Papuan weevils (Acari: Cryptostigmata). *Pacific Insects*, 8: 281–289.
- Aoki, J. (1967) Microhabitats of oribatid mites on a forest floor. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo, Series A, Zoology*, 10: 133–140.
- Aoki, J. (1973) Soil mites (oribatids) climbing trees. In: Proceedings of the 3rd International Congress of Acarology (eds., Daniel, M. and B. Rosický), pp. 59–65, Springer-Science+Business Media, B.V., NY.
- Aoki, J. (1976) Oribatid mites from the IBP study area, Pasoh Forest Reserve, West Malaysia. *Nature and Life in Southeast Asia*, 7: 39–59.
- 青木淳一 (1978) 打込み法と拾取り法による富士山麓青木ヶ原のササラダニ群集調査。横浜国立大学環境科学研究センター紀要，4: 149–154.
- Aoki, J. (1980) A revision of the oribatid mites of Japan. I. The families Phthiracaridae and Oribotritidae. *Bulletin of the Institute of Environmental Science and Technology, Yokohama National University*, 6: 1–89.
- 青木淳一 (1983) 自然の診断役 土ダニ，NHK ブックス 438。日本放送出版協会，東京。
- 青木淳一 (1992) 日本ダニ学会の発足にあたって。日本ダニ学会誌，1: preface.
- 青木淳一 (1995) 土壤動物を用いた環境診断。「自然環境への影響予測—結果と調査法マニュアル（沼田 真編）」。pp. 197–271，千葉県環境部環境調査課，千葉市。
- 青木淳一 (2000) 都市化とダニーコンクリート建造物のコケに生息するササラダニ類。東海大学出版会，東京。
- 青木淳一 (2008) 土壤中にすむササラダニに魅せられて50年（第5回日本動物分類学会賞受賞記念論文）。タクサ（日本動物分類学会和文誌），25: 1–11.
- 青木淳一 (2009) 南西諸島のササラダニ類。東海大学出版会，秦野市。

- 青木淳一 (2012) 日本産ホソカタムシ類図説—ムキヒゲホソカタムシ科・コブゴミムシダマシ科. 昆虫文献六本脚, 東京.
- 青木淳一 (2013) ホソカタムシの誘惑. 第2版: 日本産ホソカタムシ全種の図説. 東海大学出版会, 平塚市.
- 青木淳一 (2016) 青木淳一命名のササラダニ類の和名の説明. 日本ダニ学会誌, 25: 45–50.
- 青木淳一・原田洋 (1982) 東カリマンタン (ボルネオ) の土地利用による環境変化と土壌動物相. 横浜国立大学環境科学研究センター紀要, 8: 341–378.
- 青木淳一・山本佳範・文在根・王慧芙・胡聖豪 (1997) 中国大陸産ササラダニ類目録 (第1報). 横浜国立大学環境科学研究センター紀要, 23: 63–80.
- Aoki, J. and H.-F. Wang (1986) Two oribatid mites injurious to economic plants (Acariformes: Oribatida). *Acta Zootaxonomica Sinica*, 11: 375–378.
- Aoki, J., G. Takaku and F. Ito (1994) Aribatidae, a new myrmecophilous oribatid mite family from Java. *International Journal of Acarology*, 20: 3–10.
- Bayartogtokh, B. and J. Aoki (1997) New species of oribatid mites (Acari: Oribatei) from Mongolia. I. *Journal of the Acarological Society of Japan.*, 6: 123–132.
- Behan-Pelletier, V. and Z. Lindo (2023) Oribatid Mites: Biodiversity, Taxonomy and Ecology. CRC Press, Boca Raton.
- Choi, S.-S. and J. Aoki (1985) The oribatid mites (Acari: Cryptostigmata) of Korea (2). On the genus *Allodamaeus*-species. *Proceedings of the Japanese Society of Systematic Zoology*, 31: 1–6.
- Colloff, M. J. (2012) New eremaeozetid mites (Acari: Oribatida: Eremaeozetidae) from the south-western Pacific region and the taxonomic status of the Eremaeozetidae and Idiozetidae. *Zootaxa*, 3435: 1–39.
- Heethoff, M., P. Bergmann, M. Laumann and R. A. Norton (2013) The 20th anniversary of a model mite: A review of current knowledge about *Archeogozetes longisetosus* (Acari, Oribatida). *Acarologia*, 53: 353–368.
- Ito, F. and G. Takaku (1994). Obligate myrmecophily in an oribatid mite: novel symbiont of ants in the Oriental tropics. *Naturwissenschaften*, 81: 180–182.
- 加藤陽一 (2013) 中学国語教科書を読む (11) 「自然の小さな診断役」(青木淳一), 「文化を伝えるチンパンジー」(松沢哲郎). リベラシオン (人権研究ふくおか/福岡県人権研究所), 151: 131–138.
- Krantz, G. W. and D. E. Walter (2009) A Manual of Acarology: Third Edition. Texas Tech University Press, Texas.
- Maraun, M. and S. Scheu (2000) The structure of oribatid mite communities (Acari, Oribatida): patterns, mechanisms and implications for future research. *Ecography*, 23: 374–382.
- Oliveira, A. R., P. S. Argolo, G. J. de Moraes, R. A. Norton and H. Schatz (2017) A checklist of the oribatid mite species (Acari: Oribatida) of Brazil. *Zootaxa*, 4245: 1–89.
- Shimano, S. (2011) Aoki's oribatid-based bioindicator systems. *Zoosymposia (Proceedings of the 13th International Congress of Acarology)*, 6: 200–209.
- Subías, L. S. (2023) Listado sistemático, sinonímico y biogeográfico de los ácaros oribátidos (Acariformes, Oribatida) del mundo (except fósils) (18a actualización). Available at http://bba.bioucm.es/cont/docs/RO_1.pdf (1 May 2023).
- Thomas, R. H. (2000) Mites as models in development and genetics. In: *Acarid Phylogeny and Evolution: Adaptation in Mites and Ticks. Proceedings of the IV Symposium of the European Association of Acarologists* (eds., Bernini F., R. Nannelli, G. Nuzzaci, E. de Lillo), pp. 21–26, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Wen, Z.-G., J. Aoki and X.-Z. Wang (1984) Studies on the oribatid mites of China. I. The first report on the oribatids from Mt. Sheshan, Shanghai. *Contributions from the Shanghai Institute of Entomology*, 4: 295–307.